

韓国人ニューカマーの日本語学習経験：フロー理論 の観点から

朴, ウギョン
九州大学大学院地球社会統合科学府

<https://doi.org/10.15017/6767902>

出版情報：地球社会統合科学. 29 (2), pp.21-38, 2023-02-15. Graduate School of Integrated
Sciences for Global Society, Kyushu University

バージョン：

権利関係：© 2023 PARK Wookyoung



박
朴ウギョン

PARK Wookyoung

キーワード：日本語学習経験 韓国人ニューカマー 外国人材 フロー理論 現象学的インタビュー

1. 研究背景

本稿の目的は、韓国人ニューカマーの日本語学習経験が当事者にとってどのような意味を持つのかをフロー理論の観点から提示することである。

1980年代以降に来日し日本で暮らす「日本語を母語としない人々」をニューカマーと呼ぶ（富谷，2009，p. 214）。韓国人ニューカマーの日本語学習経験に注目する理由は、来日後、彼らは教育機関を通じて日本語を学習する機会に恵まれず、多くの場合、日本語学習は自らの努力で行うしかない立場にあるからである。韓国人ニューカマーは1980年代後半以降、日韓経済交流が活発になってから増加し、2000年代にはIT人材の増加が顕著であった（松下，2021）。韓国政府は1998年、国際通貨危機による国内の就職難を打開するために海外就職を希望する若者を対象に短期間の語学教育と職務教育を支援する制度を始めたが、その制度は現在も活発に運営されている（임경식，2019）。日本での就職に求められる日本語能力は日本語能力試験N2がもっとも多い（김선영，2021）が、日本語能力試験ホームページ¹によると、N2の認定の目安は「話の流れや要旨を把握できるレベル」となっており、N1の目安である「さまざまな話題や深みのある読み物が理解できるレベル」とは差がある。就職に成功するための日本語学習に関する研究は盛んに行われているものの、韓国人ニューカマーが来日した後、仕事や生活において日本語に関してどのような問題があり、どのような場合に日本語学習の必要性を感じ、どのように日本語学習を行っているのかなどについて調査研究されたものが管見の限りでは無い。

日本政府は2018年7月「外国人材の受入れ・共生に関する関係閣僚会議」²を開き、受入れ業種の検討、在留管理体制の強化、日本語教育の充実等の受入れ環境の整備について、政府一体となって総合的な検討を始めた。2019年6月に公布された「日本語教育推進法」³では、外国人等が日本語教育を受ける機会を最大限に確保し、日本語を学習する意義について外国人等の理解と関心が深められることを基本理念としている。また、日本経済団体連合会も2022年2月「2030年に向けた外国人政策のあり方」⁴に関して提言し、中長期的な社会統合施策として日本語教育を挙げている。特に、“一旦学校を卒業すると良質な日本語教育へのアクセスが困難になるとの指摘もあり、政府としてオンライン学習ツールの充実・発信に努めるべきである”と具体的な学習ツールにまで触れるほどニューカマーの日本語学習は社会的に重要課題である。

成人学習者は「なぜ学ぶのか」を常に問う（渡邊，2007，p. 155）。学習過程において意味を見つけないことができない場合、学習は中断される。現在、日本ではジェンダー、人種、国籍、価値観など多様な外国人が働いている。彼らが日本で長期的にキャリアを積むことができるために日本語学習は必要である。彼らの多様な価値観、多様な動機づけ、多様な満足感に日本語教育が答えるためには、日本語学習の楽しさ、満足感という観点からアプローチする必要がある。

近年、教育学分野においてフロー理論を取り入れた研究が増えている。フローは、内発的に動機づけられた自己の没入感覚を伴う楽しい経験を指し、人はフロー経験を通してより複雑な能力や技能を持った存在へ成長できる（浅川・チクセントミハイ，2009，p. 4）。韓国人ニューカマーの日本語学習経験をフロー経験という観点から理解しようとする本稿の試みは、日本語教育分野において学術的意義がある。

2. フロー理論

フロー理論は2つの側面から成り立つ（浅川・静岡大学教育学部附属浜松中学校，2011，p. 7；石村ほか，2008；Nakamura & Csikszentmihalyi，2002）。ひとつはフロー経験とその生起条件を説明する“現象学的モデル”としての側面、もうひとつはフロー経験をとおしてより複雑な能力や技能を持った存在へと成長していく過程を理論化した“人間発達のモデル”としての側面である。それは、挑戦と能力のレベルとそのバランスによって決まるフロー経験の生起条件を概念化した「図1」と、フロー経験をとおして人はどのように成長していくかを図式化した「図2」で示されている。

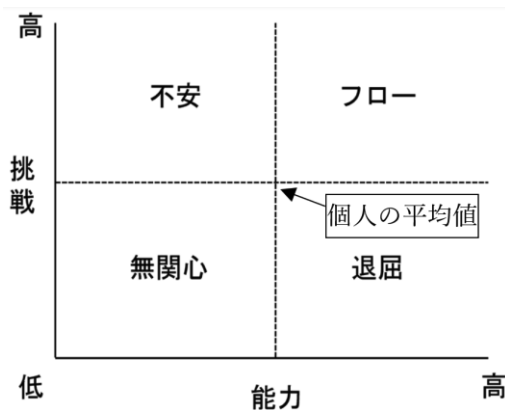


図1 フロー経験の生起モデル

出典) Csikszentmihalyi & Csikszentmihalyi (1988, p. 259) より改変

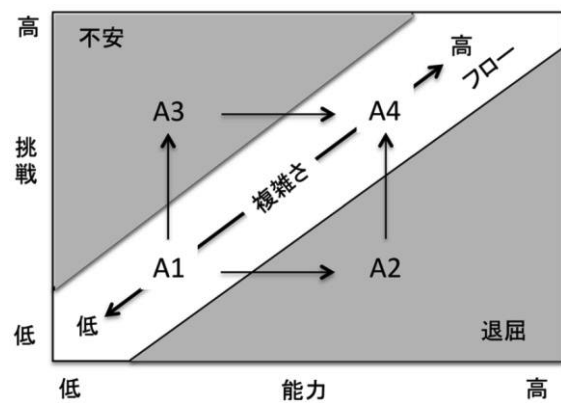


図2 フローの発達モデル

出典) Csikszentmihalyi (1990/2004, p. 144) より改変

「図1」は、挑戦と能力のレベルが個人の平均値より高い状態を“フロー”状態、挑戦のレベルが個人の平均値より高く、能力のレベルが個人の平均値より低い状態を“不安”状態、挑戦のレベルが個人の平均値より低く、能力のレベルが個人の平均値より高い状態を“退屈”状態、挑戦と能力のレベルがともに個人の平均値より低い状態を“無関心”状態とする。

「図2」の中のA1は、低いレベルではあるが、自分の持つ能力と活動に必要な挑戦がつりあって活動を楽しむことができる状態である。ところが、その活動を繰り返すうちに自分の能力が少しずつ高

まっていったA2の状態になるとその活動を退屈に感じる。あるいは、難しい課題に直面してA3の状態になると不安を感じる。退屈や不安から逃れ、楽しい状態であるA4になるために挑戦のレベルをあげるか、能力を向上させる。さらに、人はA4よりも高いレベルのフローを経験するために新しい活動へ向かうというメカニズムである。

このモデルを言語学習に適用すると、挑戦と能力のバランスがフローを生むところは、インプットのレベルを学習者の言語能力より少し上のレベル($i+1$)で行うと効果的であるというKrashenの第二言語習得のインプット仮説⁵と重なる部分がある(崎山・寺尾, 2017; Egbert, 2003; Kimura, 2008; Krashen & Terrell, 1983)。また、最適な水準の挑戦が既存の能力を伸ばすところは、Vygotskyの発達の最近接領域⁶に類似している(浅川・静岡大学教育学部附属浜松中学校, 2011, p. 15; 石村ほか, 2008; Kimura, 2008; Nakamura & Csikszentmihalyi, 2002)。環境(挑戦)と個人(能力)の相互作用に関して注目したところは、Longのインターアクション仮説⁷と類似する部分がある(Egbert, 2003)。

フロー経験の特徴は「挑戦と能力のバランス」、「行為と意識の融合」、「明確な目標」、「はっきりとした知覚的フィードバック」、「今この場の課題への集中」、「コントロール感」、「自意識の消失」、「時間知覚の変容」、「それ自体が目的となる楽しい経験」がある(杉山, 2019; Jackson & Marsch, 1996)。

3. 先行研究

本稿は韓国人ニューカマーがどのような日本語学習経験をしているかを明らかにし、フロー理論の観点から理解することを目的とする。管見の限り、ニューカマーの日本語学習に関する研究は極めて少ない。日本語教育分野の先行研究ではライフストーリー研究方法をとる傾向が際立つ。一方、教育学分野の研究においては近年フロー理論を取り入れた研究が増えている。

3.1 ニューカマーの日本語学習経験に関する先行研究

中井(2018)は、日本で留学を経て就労している中国人の日本語学習経験に関するライフストーリーから、学習者オートノミーを社会的文脈で捉えようとした。ライフストーリーは4つのエピソード<王さんにとっての日本語と日本語学習の意味><潤滑油であると同時に自分のなりた姿を実現するためのことば><日本語学習のモデルとサポートの存在><今の王さんにとっての日本語学習>で構成され、日本語は社会的アイデンティティを構築するための道具であり、日本語学習はその道具を取得するためであると結論付けた。

イ(2019)は、社会人として日本に住む韓国人元留学生2名のライフストーリーをとおして日本語習得とアイデンティティに関して考察した。留学生から社会人への環境の変化の中で、自身のおかれた環境下で実現したい自分を探し、その実現に向けて日本語への投資を行っていると解釈した。

他に、元留学生の学生時代の学習経験を主に扱った佐藤(2013)は、元私費留学生Aさんの「日本語学校」「大学」「大学院」時代を経て「日本語の学びを支援する私」へと成長するライフストーリーをとおして、日本語学習が自己実現に繋がる様子を提示した。

これらのライフストーリー研究は、日本語学習より日本語学習をとおした学習者と社会との関係性を論じている。川上（2015）はライフストーリー研究について「これまであまり知られていなかった学習者の視点からの言語学習、特に社会的な関係性の中でどのように学習を進めているのかを、学習者の意味づけを含めて明らかにしようとしている研究」（p. 34）であると評価する一方、「『社会的現実』を提示することに力点が」置かれ、「『日本語教育学』のためのライフストーリー研究になりえていない」（p. 41）と指摘している。

3.2 教育学分野におけるフロー研究

フローを経験できる可能性はほとんどすべての活動において存在し、フローの楽しい感覚は繰り返され、複雑な進化を可能にする（Csikszentmihalyi, 1993/2009, p. 274）。フロー状態にあるとき、人は時間感覚を失う程の高い集中力を示し、活動を楽しみ、高いレベルの満足感、状況のコントロール感、自尊感情の高まりを経験する（浅川・静岡大学教育学部附属浜松中学校, 2011, p. 6から再引用; Csikszentmihalyi, 1990/2004）ことから、教育学分野では教育場面、学習場面においてフロー経験を増やすための研究が増えている。

鈴木・大宅（2022）は、中国語の学習場面でストレスによって生じるネガティブな感情反応を改善するためにフロー理論を援用し、「グループワーク・トレーニング」を取り入れたアクティブラーニング型授業を行った。フローを経験するための条件（（1）活動の挑戦レベルと能力レベルが釣りあっていること、（2）活動の目標が明確であること、（3）明確なフィードバックが即座に得られること）とコミュニケーション・タスクの条件を踏まえて中国語クラスのタスクを設定し、授業後に自由記述アンケートを行った。タスクを設計する際に、学生の語学のレベルとタスクの難易度のバランスを教員が調整することで、効果的な授業を行った。

大井田ほか（2018）は、外国語学習でフロー体験をすると学習が楽しくなり自発的に学習したくなるということから、中国語学習にドーム映像を使用した実験授業を行い、平面映像以上にフロー体験において効果が高いことを立証した。

崎山・寺尾（2017）は、フロー理論は主体的な学習者を生み出す教育環境作りを考える際にきわめて重要な視点を与えてくれるとし、中学校英語教育における学習環境をフロー理論に基づいて改善するためにフローの概念、諸条件に関して理論的検討を行った。また、オンデマンド言語学修への応用に関しても考察した。

その他にも、加藤ほか（2013）は、eラーニング教材や教室での講義などにおける学習教材・学習環境を動機づけの観点から改善するために「フロー理論に基づく学習教材・学習環境再設計支援フレームワーク」を提案し、また「フロー理論適合度チェックリスト」を開発したことを報告している。

浅川・静岡大学教育学部附属浜松中学校（2011）は、静岡大学教育学部附属浜松中学校でフロー理論を理論的枠組みとして『「学びひたる」授業の創造』という教育研究を行った。国語、社会、数学、理科、音楽、美術、保健体育、技術、家庭、英語科のすべての科において授業中のフロー経験を促進し、生徒の最適発達を援助しようとした。その結果、学びに対する生徒のポジティブな態度を

育成し、学力を向上させることができた。

以上のように、中国語学習、教科学習に関するフロー経験の研究の蓄積は進んでいる。しかし、日本語教育分野ではフロー理論に関する検討がまだ行われていない。まず、日本語学習においてはどのようなフロー経験があるかを明らかにする必要がある。

4. 研究方法

初期のフロー研究は主にインタビューを通じて行われた（Csikszentmihalyi, 1975/2003）。本研究でも韓国人ニューカマーの日本語学習経験に関してインタビューを行った。インタビュー方法は、個人の経験とその意味をより深く理解するために考案された“現象学的インタビュー（Seidman, 2019/2022）”に従って、3回の深層面談で構成した。このインタビュー方法の特徴は、各回の面談時間は約90分で、研究協力者が前回の面談に対して熟考できるよう、また、二つの面談の間の関連性を失わないように各面談の間に3日から1週間の期間を置くことである。インタビューは韓国語で実施し、1回目のインタビューでは過去から現在に至るまで研究協力者の日本語学習経験を、2回目では日本語学習に関する研究協力者の現在の状況を、3回目では研究協力者にとって日本語が持つ意味・日本語学習が持つ意味に関して聞いた。インタビューの質問項目は「表1」のとおりである。

表1 インタビューの質問項目

1 回目： 今までの日本語学習経験
- 日本語学習のきっかけは何ですか？（当時の年齢、エピソードなど）
- 日本語の初級時代はどのように学習しましたか？ （当時の年齢、学習場所、学習期間、学習方法、教材、先生、一緒に習った人など）
- 日本語の中級時代はどのように学習しましたか？（上記同様）
- 日本語の上級時代はどのように学習しましたか？（上記同様）
- 日本語学習に没入した経験がありますか？それはどのような経験でしたか？ （当時の年齢、没入した期間、学習場所、学習方法、教材、先生、一緒に習った人など）
2 回目： 現在の日本語学習
- 現在、日本語学習はどのようにしていますか？ （学習場所、教材、先生、一緒に習っている人、学習方法、学習期間など）
- 最近、新たに覚えた日本語の単語や表現がありますか？それは何ですか？どのような方法で習いましたか？
- 現在の日本語学習方法が韓国での学習方法と比べて変わったことがあれば、それは何ですか？
- 現在の日本語学習に特に役に立っているのは何ですか？
- 日本語学習において最も大事なものは何だと思いますか？ （話す、聞く、書く、読む、文法、語彙、現地人との会話、独り言など）なぜそうに思いますか？
3 回目： 私にとっての日本語とは。日本語学習とは。
- 平素、頭の中で考える時、日本語で考えますか、韓国語で考えますか？
- 日本語も韓国語と共に自分の言語だと思いますか？
- 日本語学習はあなたにとって義務ですか、趣味ですか？苦痛ですか、楽しみですか？
- 日本語学習はあなたにとってどのような意味がありますか？
- 3年後の自分はどのような姿になっていると思いますか？

研究協力者の条件は、日本に3年以上居住しており、勤めている会社で業務上日本語を使っている韓国人とした。研究協力者の募集のためにインタビューの概要や研究倫理に関する事項などを記載した「研究協力依頼書」を作成し、SNS上で広報、SNSのダイレクトメールを使った呼びかけ、知人への紹介依頼などを行った。協力の申し出があった3名から「研究説明および参加同意書」により同意を

得て、ZOOM®を用いて面談を行った。音声を録音し、インタビュー直後に文字化した。研究協力者たちの概要は「表2」に示す。

表2 研究協力者の概要

研究協力者	Aさん	Bさん	Cさん
インタビュー日時	1次 2022.01.08.(90分) 2次 2022.01.17.(70分) 3次 2022.01.23.(70分)	1次 2022.01.19.(90分) 2次 2022.01.22.(70分) 3次 2022.01.27.(75分)	1次 2022.02.12.(70分) 2次 2022.02.19.(75分) 3次 2022.02.26.(60分)
年齢	32歳	42歳	30歳
性別	女性	女性	女性
学歴	学士(文系、韓国) 専門課程(IT関連、日本)	学士(経営学、韓国) 修士(インフォメーションマネジメント、米国)	学士(日本地域学、韓国)
居住地	埼玉県	東京都	埼玉県
同居家族	独身	夫(日本人:2007年結婚) 息子2人(小学校3年生、3歳)	夫(日本人:2020年結婚)
来日時期	2016年7月	2006年11月	2015年4月
来日時の日本語レベル (自己評価)	上級	初級	上級
日本就労期間	2020年4月～現在(1年9ヶ月)	2006年11月～2017年11月 (休職後2020年退社)(11年)	2015年4月～2020年(転職) 2020年～現在(6年10ヶ月)
業種	IT(ウェブサービス)	ITコンサルティング	IT(ウェブサービス)
会社規模	全体3,000名、チーム21～22名	全体3,000名、チーム4～20名	全体120名、チーム5名
担当業務	運用保守エンジニア	コンサルティング	ブランド企画
業務における日本語使用	プレゼンテーション、会議、 マニュアル作成、メール対応	プレゼンテーション、会議、メール対応、 日英翻訳・通訳	前職)訪問営業、事務、アナウンサー 現職)ウェブコンテンツ制作、企画

Aさんは、32歳、女性、中学時代からアニメ視聴が趣味で、高校時代も趣味の一つとして日本語学習を続けた。韓国で文系の4年制大学を卒業した後、日本でいわば「IT就職」をすることを決めて2016年7月来日した。日本語学校を経てIT専門学校を卒業した後、マイナビなどを利用して就職活動を行い、2020年4月、米国に本社があるIT企業にインフラ・エンジニアとして就職した。インタビュー時点では入社1年9ヶ月目で、業務上使用する日本語は、毎日の会議では担当業務に関する報告、上司・同僚と情報共有・相談、定例会議ではエラーケースに関するプレゼンテーション、日々の業務ではマニュアル作成、顧客メールへの対応などである。

Bさんは42歳、女性、韓国では経営学を専攻し、米国では修士課程で情報経営学を専攻した。米国で出会った日本人の恋人が日本で就職することになったことをきっかけに、本人も日本滞在を決め、ジョブフェアに参加し、米国本社のIT企業に採用された。当時、Bさんの日本語レベルはひらがなが読めるぐらいで、会社は採用条件として「入社後日本語学習をすること」を求めた。2006年11月入社し、ITコンサルタントとして勤め、転職したことはなく11年間勤めた。Bさんが業務上で日本語を使うようになったのは入社後3年程度経過してからで、メール作成からはじめ、日英翻訳・通訳、コンサルタント・アナリストとしてのプレゼンテーションなどへと日本語能力を伸ばした。来日して1年後結婚し、現在は小学校3年生の長男、3歳の次男がいる。

Cさんは、30歳、女性、日本語は中学・高校時代に独学で勉強し、高校2年の時、日本語能力試験N1を取得、大学では日本地域学を専攻し、大学3年の1年間は東京にある大学で交換留学した経験を持つ。2015年4月、韓国の人材紹介会社を通じて、日本のメディア関係企業に就職し5年間勤めた後、2020年夏、韓国が本社のIT企業に転職した。前の会社には総合職として入社し、1年目は訪問営業、2年目は事務職、以後は会社のアナウンサー養成研修を受け、テレビ出演した経験を持つ。2020年に転職し、

会社のウェブサービスの広報、コンテンツ作成を担当している。また、本人の日本語独学の経験をYouTubeに載せている。2年前に前職の同僚だった日本人の男性と結婚し、インタビュー時点では妊娠中であった。

5. 分析結果

インタビューデータの分析は、スペイン語のクラスでフローの存在を検証したEgbert (2003) に倣い、フロー理論を分析の枠組みとした。本節では、「挑戦と能力のバランス」、「課題への集中」、「それ自体が目的となる楽しい経験」、「コントロール感」を中心に、それぞれの特徴が現れるインタビューデータを提示する。

5.1 「挑戦と能力のバランス」

フロー理論では挑戦と能力のバランスをもっとも重要な特徴であるとしている。前述のとおり、挑戦と能力のバランスは、言語習得におけるインターアクション仮説やインプット仮説、発達の最近接領域理論とも繋がる。研究協力者3名においても日本語学習は挑戦と能力がつりあって行われていることが確認された。

Aさんは中学生のころからアニメが好きで、また好きな友達と日本人の先生がいる塾に通うことが楽しくて遊びの一つとして日本語に触れていた。そのようなAさんが日本語学習に取り組んだのは、日本で就職したいと思ってからのことである。Aさんの日本語学習は挑戦が先行し、能力を上げてきた。以下、下線部は筆者による。

“日本に行ったらアルバイトができるように日本語が話せるようにならないと思って「電話日本語⁹⁾」を始めました。”

“アルバイトではいろんな状況に遭遇するので、その時に使われる日本語は背中を見て学んで、同じくマネしてみても覚えていきました。”

“仕事で役に立てたいと思って電話会話授業をまた受けることにしました。フォーマルな日本語をもっと習いたいです。”

Bさんはひらがなしか知らない状況で来日し、2～3年間日本語が話せなかった。会社から課された日本語に関する課題に向き合っていくなかで、日本語能力を伸ばしてきた。また、育児をはじめからは、仕事上の日本語とは異なる新しい日本語の学習を自分の発展に繋がる挑戦であると解釈し、能力を伸ばしている。

“日本語が話せなかった時ですが、会社が支援してくれて、サップというシステム資格を取りました。「あなたは日本語ができないけれど、頑張る意志があれば教育に行かせる」と言わ

れて、はい、と言いました。それは費用がとても高くて有名な教育でしたから。授業は主に会計用語を使うので、韓国語でメモを取りながら、先生に質問はできませんでしたが、聞き取りはできました。”

“担当するチームに所属する社員が誰かをクライアントに情報提供する時、「外国人だけど日本語ができるのか」と、そのようなことを言う少し保守的な企業がクライアントの場合はJLPTの資格を要求される場合があります。ですから、会社から「2級は持っていたほうが良い」と言われて、2級試験を一度受けました。その時、受験料が5万ウォンくらいだったと覚えています、それは会社が後で払ってくれました。”

“入社して2年半ぐらい経って、ユーザーが200人ぐらいいるクライアントの方に配属されました。会社は私が日本語を使っていないことを知っていたので、「あまり負担感を持たずに学ぶつもりで行きなさい、私たちとすごく関係の良いクライアントだからぶつけてみなさい」と、そのような感じで言いました。”

“長男が1歳になってから保育園に通いましたが、毎日ノートを書かなければならなかったことは私にとって本当にチャレンジでした。今まで日本語を手で書いたことが無かったから、漢字は読めるけど書けないし、書体も子供のようでした。これをもって私も勉強する、発展すると思ったので、わざと毎日の出来事を長くして、書字の練習や漢字の練習も兼ねて、携帯に打ち込んだものを見ながら毎日毎日書きました。子供が1歳の時と5歳の時の私の字は全く違います。”

“長男が小学校に入学したとき、長男と話しました。「ママは韓国人だから、その教科書を見たことがないので、教科書にあるものを知らないかもしれないよ。あなたは先生に習うから、あなたが習ってママに教えてほしい」と話しました。私が知らないものを持ってきたら、「ママも知らない表現だから一緒に辞書を引いてみよう」と言っています。”

Cさんは中学3年の末、嵐のファンになり、高校2年までの2年間日本語に夢中だった。独学で日本語会話の本と嵐のバラエティー番組に毎日触れながら学習し、高校2年の夏、日本語能力試験のN1を取得した。この2年の学習経験をとおしてCさんにとって日本語は特技になり、Cさんは日本語学習にもっと愛着を持つようになった。

“バラエティー番組を見る時、最初は韓国語の字幕があるものを見ましたが、だんだん字幕を邪魔に感じてきました。なぜなら、番組は字幕がとても多いのですが、その上に韓国語の字幕が重なってしまって、理解を妨げると思ったからです。それで、日本語の字幕をもっと意識して読もうとしました。番組を音で聞くだけだと聞き流してしまったかも知れないことが字幕で出て、目で見て再び学びますから単語を覚えやすかったです。”

“高校2年のとき、領事館で行われたスピーチ大会に出て入賞しました。今までの努力と自分の実力が公式に認められたと思うと、もっと日本語が好きになり、自信が持てました。”

“希望する大学に合格してから、ネイティブのように日本語が話せることを最終ゴールと決めて、NHKニュースでシャドーイング¹⁰を始めました。週2～3回、2～3時間ずつ練習しました。ニュースとスピード、発音、アクセントがほぼ同じくなるまで繰り返し練習しました。いつも声がかすれて体力が尽きるまで練習したので疲れましたが、今になって見ると、それが自分の大きな強みになったのでやってよかったと思います。”

“前の会社は放送チャンネルを持っていて、ニュースを読んだり、リポートをしたりするアナウンサー職がありました。私が興味を見せると研修を受けさせてくださって、番組にも出演したりしました。日本語で日本人アナウンサーと同等にやってみたい、チャレンジしてみたいと思いました。”

5.2 「課題への集中」

学習者が何に注目し、認識するかによって第二言語習得は大きく左右される（Schmidt, 2012）。言語習得研究では言語形式への注意を強調してきたが、フロー理論では意識の集中を強調する点において相違する。研究協力者たちは、個人の興味や仕事上の必要などにおいて日本語を意識し日本語学習に集中していた。

Aさんは好きなアニメを楽しむだけでなく、アニメの中の日本語に集中した。

“ジブリが好きで「千と千尋の神隠し」は200回近くみました。セリフを全部覚えていました。”

“韓国で見ていたアニメを今も見ています。ネットフリックスで見ますから、字幕はありません。たまに聞き取れない単語が出てくると、そのセリフを何度も繰り返して聞いて、耳をくっつけて、辞書を検索します。セリフをほとんど暗記しているけど、たまに聞き取れない単語、ことわざや俗語がそうです。”

“生活では現れなかったことが、発表をしたり、授業を受けたりすると気付くときが多々あります。”

Bさんは大学1年生の夏休みに日本語学習をしたことがあるが、英語とフランス語を学習した経験に比べてうまく習得できた気がなくて、日本語は自分には合わない言語だと思った。その考えは大学2年生の夏休みに中国語を習ってみてもっと確実になった。そのようなBさんが、業務上の必要によって日本語学習に意識を集中するようになった。それは全身で集中している感覚を伴った。

“クライアントには日本語の資料を出しますが、社内には英語の資料が必要でしたので、同じものが日本語・英語で両方あって、いつも見比べました。その資料をもって会議に入って、これをこのように読むんだと、それを繰り返しました。”

“配属されてしばらくの間は何も話さず、メールも書かず、チーム宛てに届くメールばかり読みました。一日100通近くメールが届いたので、それをずっと読みました。そうしているうちに、メールの典型的な型が見えて、最初に必ず入る文章のいくつか、最後に必ず入る文章のいくつかをテンプレートで作っておいて、真ん中の私が書かなければならない部分だけを気を付けて、メールを書くようになりました。最初の1週間は自信がないので、チーム長に見てもらってから送りました。”

“日本語がある程度できるようになるまでは、朝お家を出る瞬間から夜戻る時まで、私にはアンテナが立っていました。そのアンテナで、聞いて見て話して書いて、全部できるようにですね。アンテナが立っている感じ、緊張感が常にありました。なぜなら、私は英語で話している時を除けば、いつも習っている瞬間でしたから。”

“プレゼンテーションの前に自分の声を録音し聞いてみると、これは外国人だと、グツときますから、外国人だからその程度かと思われるのが嫌でした。”

Cさんは中学校3年の末から高校2年までの2年間を日本語に没頭した。知らない単語があったら即時インターネット辞書で検索した。今も分からない単語、表現に出会ったら本人が理解するまで、単語検索、例文検索はもちろんのこと、本人が作成した文章を検索してみるなど、自分のできるすべての方法を使って日本語を学習している。

“中学校3年生の時から高校2年生までの2年間が最も日本語に没頭していました。学校にいる時間、寝る時間、ご飯を食べる時間を除いて残りの時間はすべて日本語の勉強に費やしました。私にとっては勉強ではなく、遊びのようでした。大変なこと一つもなく楽しかった記憶だけが残っています。”

“知らなかったり、よく意味が分からなかったりする単語があれば、Goo国語辞典で調べます。辞書を読んでもしっかり理解できた気がしなかったら、Googleで検索していろんな例文を見ます。辞書を読んでニュアンスが少し分かったら、その単語を使って文章を作ってみて、その文章でまた検索して実際に使われているかどうかを確かめます。文章が書けなかったら「単語＋例文」と検索して、例文から見たりもします。”

“職務が変わったり、職場が変わったりすると、慣れていないので必要な日本語が検索をしても出てこないんです。そのような時は先輩たちの話していることに耳を立てて、メモして、机に貼っておいて覚えました。”

“知らない単語が減ったので、最近はテレビや生活の中で知らない単語が出てきたら、その単語だけがとても大きく聞こえるような気がします。”

5.3 「それ自体が目的となる楽しい経験」

フロー理論は情動論的動機づけ理論の一つ（鹿毛ほか, 2011, p. 32）として学習者の感情を取り扱

う。フロー理論では遂行に適切な特性を持つ感情、興味や趣味、関心などについて広く取り扱っている。Mcquillan & Conde (1996) は、読む活動におけるフロー経験は読者が背景知識や興味があるときによく起きると報告している。一方、Mitchell (1988) は、「ストレスは、一連の人や出来事に関連した緊急性、重要性、または重要性が認識された社会心理学的状態として定義できる。それなしではフローはありえない」(p. 57) としている。意識性の高い活動やストレスのある労働の場面においてもフローは存在し、楽しい経験はそのフロー経験の産物である。

Aさんは日本語が好きだと何度も繰り返した。日本語が流行っていて、日本語が好きになり、友達も日本語が好きだった。日本語を習うということは一つの遊びであった。日本語学習で漢字を習い始め、困難を経験し、日本語能力試験には不合格したが、それも良い経験であったと言う。

“日本が好きというより、日本語が好きで、ひらがなが可愛くて習い始めました。”

“友達も日本語が好きで一緒に塾に通って、遊びました。”

“日本語が流行っていたのでもっと興味を持ちました。”

“興味が無ければやらないタイプなので、日本語が好きだったから日本語を習う楽な方法、楽しい方法を探しました。”

“日本語能力試験の準備は本当に大変でした。でも、自分がやりたくてやったので、良い経験だったと思います。”

Bさんの会社はBさんに日本語能力の伸長を求め続けた。Bさんも日本語ができなければ業務的に支障が生じかねないということを知っていた。それにもかかわらず、Bさんは楽しかったと言う。日本で暮らすこと、日本語で働くこと、それに伴う日本語学習もBさんにとって楽しい経験であった。

“会議の内容を全て理解することはできなかったし、ストレスを感じた時もあったと思います。しかし、全体的にはとても楽しんでいました。私は日本に来て間もないし、心を尽くして早く学ばなければならないと知っていたし、新しい場所で新しいチャレンジをするのが好きですし、そして私はいつも早く学ぶ人だと、なんとなくいつもそのように思っています。”

“電車を待っている時、「各駅電車が来ます」と毎日聞こえていたのが、ある日は、「停車」だったんですね。電車ではなく停車だったんです。家に帰って主人に「電車ではなく停車だったよ」と話したことを思えています。私の日本語が伸びているという証拠のようで、その発見がとても嬉しかったです。”

Cさんは日本語が上達すると、日本語で遊ぶことができたと言う。また、日本語学習を通じて好きなことを見つけ、やりがいと達成感を感じた。CさんはYouTubeに、ラジオ番組のように台本を読んで歌を紹介したり、自分の勉強法を紹介したりする動画を載せている。

“高校2年までテレビ番組をずっと見ていたし、ペンパルを続けていたので実力が上がって、初級時代のように没頭するような学習法とは違って、日本語をもって遊ぶことができました。ニュースを見て知っている単語が少しでもあったら、それが動機づけになってまた見ました。”

“勉強したことを使ってみたかったです。勉強したことを使って話し合いがしたかったです。それで、私が「日本語を習ってよかった」みたいなやりがいを感じたかったです。”

“日本語学習を通して自分の本当に好きなことが見つかりました。好きで上手になれるものに会ったので自分に対する自信、信頼が出来、自分らしい人生を送っています。”

“私は成長という言葉が好きです。新しいことを学ぶのが好きで、今日も一つ新しいことを習ったという達成感があって楽しいです。”

5.4 「コントロール感」

フロー理論で言うコントロール感とは、行っていることとその結果を統制できるという感覚、厳しい状況にいても自ら統制力を発揮できるという感覚を言う (Csikszentmihalyi, 1990/2004, p. 120-122)。活動を完全にコントロールしていて、次に何が起ころうともその状況に対応できるといった感覚が生じるため、失敗することへの不安や心配から解放される (浅川・チクセントミハイ, 2009, p. 5)。日本語教育において学習者オートノミーに関する研究が行われているが、コントロール感は学習者の自律性に関する一つの定義として考えることができる (Egbert, 2003, p. 505)。

Aさんはアニメの中の日本語に集中してセリフを全部覚えていて、その知識を活用し、日本語において直面する高いレベルの挑戦をコントロールした。また、日本語を状況に合わせて使い分けているし、これからもっと習うべき日本語は何かを認知し学習している。

“「電話日本語」で話し合って、知らない単語があったら、知っている自分の日本語を使って、自分の知らない単語が何かを説明しながら話しました。”

“「仕事で使う日本語は、毎日使う文章でも、状況によって変える、温度感と言うか、連絡の間を考えたり、クレームを気にしたりするので難しいです。敬語の使用は今も難しいです。単語の選択よりは状況による答え方をGoogleで調べます。」

“「仕事をしていなければ日本語の勉強もしようと思いません。このままでも十分生きていきますから。しかし、仕事をしているから、もっとフォーマルな言い方が必要ですし、マニュアルも読まなければならないし、相手にこんなことも知らないのかと思われたくないし、仕事に迷惑をかけてはいけないうので気になります。」

Bさんは「急いで日本語学習をした」と言った。クライアントと会話するために尊敬語から学ばなければならず、初めての日本語作文もビジネスメールであった。Bさんは置かれた状況に必要な日本

語学習に集中し、新たな挑戦に立ち向かってきた。Bさんは今後日本語学習におけるチャレンジを予測しており、淡々と立ち向かっていくつもりであると言う。

“日本語は私にとって外国語ですから、いつも、良くなる部分があるべきだと思います。留まっているのではなく、少しでも進まないといけないと思います。外国人特有の特徴が出るのが嫌で、業務上の日本語が楽になってから自分がフォーカスすべきは発音だと思いました。発音を正確にするためにたくさん聞いて練習しました。”

“これからのチャレンジだと思っているのは、子供が大きくなっていくと学習の範囲が広がって、それを一緒にやっっていこうと思っていますので、文化や歴史に関する分野では新しい単語がたくさん出るだろうと心の準備をしています。私が先に勉強しておくということではなく、子供と一緒にやっっていこうと思っています。その時、そのレベルで必要な単語を私も覚えて行こうと思っています。”

Cさんは日本語で考えるようになったことを「日本語CPU」が出来たと表現する。そのCPU (Central Processing Unit, 中央処理装置) をもって文法、発音、アクセントを自由に操っており、日本語を自分の言葉としてコントロールしている。

“ペンパルを始めて最初は簡単なことも自由に書けなかったので大変でした。でも、あきらめないでペンパルが使っている表現を真似して自分の手紙に書いてみたりして表現力を伸ばすことができました。ペンパルを通して日本語の表現力が増し、私に「日本語のCPU」ができました。日本語で考えることができるようになりました。”

“前の会社で1年目は訪問営業をしました。サンプルトークがありましたが、それは自分の言葉ではなかったからロボットみたいに話しているような気がして、自分が使っている言葉で、自分が話しやすい方向に変えてスクリプトを作りました。”

“今は限られた文字数の中で会社のサービスを紹介する文章を作っています。文法をちゃんと勉強して知っているから簡潔な文章が書けるんだと感じます。”

“発音とアクセントが良くなったら言葉の伝達力が上がると思います。意思疎通がより楽になって、日本語に対する自信も上がると思います。”

“もう日本語が外国語だという認識がありません。韓国語でも私の知らない語彙があるように、ただ私の語彙力の問題だと思うだけで、外国語だから知らないとは思いません。”

6. 考察と今後の課題

これまでの日本語教育分野では外国人材の長期滞在、長期的なキャリアのための研究が不足しており、これから始まろうとしている。そのためには、キャリア研究に先駆けて現在日本で働いている外国人材の日本語学習に関する研究を行う必要がある。

筆者は日本語学習経験に注目した研究を行うため、経験に対する現象学的モデルを提示し、その現象の本質を究明してきたフロー理論に注目した。フロー理論を言語学習に取り入れた国内の研究は、学習におけるフローの存在、フローの効果を認めたうえで、該当分野にフロー経験を引き起こすための研究が多かった。本研究は、実際の学習経験においてどのようなフローが起こるかを示したことから、日本語教育分野だけでなくフロー研究に関しても学術的な意義がある。

3人の研究協力者の日本語学習経験に関して現象学的インタビューを行った結果、Egbert (2003)で検証された言語学習におけるフロー経験の4つの特徴、「挑戦と能力のバランス」、「課題への集中」、「それ自体が目的となる楽しい経験」、「コントロール感」が確認された。Aさんは、趣味であるアニメ視聴をきっかけに日本語学習をはじめ、「日本就職」という挑戦を選んでから本人の日本語能力の不足点が何かを把握し、自律的に日本語学習を行っていた。Bさんは、「日本語を学ぶ条件付き」で日本で働き始め、外部からのストレスが絶えなかったにも関わらず日本語学習に集中し、楽しみながら学習を続けていた。Cさんは日本語学習に没頭した2年間、楽しくて達成感があつたと認識し、その後も日本語学習に常に積極的で最善を尽くしていた。

韓国人ニューカマーの日本語学習はフロー理論の観点から見た際にその詳細が見えてきた。日本語学習は趣味、生活、仕事、メディアなど多様な状況においてその必要性が認識され、意識的なインフォーマル学習の形で行われていた。それは彼らが経験した日本語学習におけるフローが成長の原動力になっていると解釈される。

多くの日本語学習者が教育機関に属さず日本語を学んでいる(瀬井, 2021, p. 31)。日本語教育はニューカマーに対してどのような実践ができるのだろうか。以上のような学習状況に対してインプット仮説の「理解可能なインプット」、発達の最近接領域の「その人に合うレベルのサポート」の観点では対応が難しい。日本語教育者は、学習者が自ら様々な学習の形を認識し、有能な学習者としての経験を積むことができるよう助けることに注目する必要がある。

謝辞

インタビューに応じて下さった3名の研究協力者、助言を下さった九州大学大学院博士課程の指導教員およびゼミの皆さんに心より感謝いたします。

注

- 1) <https://www.jlpt.jp/about/levelsummary.html> (検索日：2022. 8. 28.)
- 2) <https://www.kantei.go.jp/jp/singi/gaikokujinzai/index.html> (検索日：2022. 9. 15.)
- 3) 「日本語教育の推進に関する法律（令和元年法律第四十八号）」<https://elaws.e-gov.go.jp/> (検索日：2022. 9. 15.)
- 4) https://www.keidanren.or.jp/policy/2022/016_honbun.html (検索日：2022. 9. 15.)

- 5) Krashenは、言語は聞いたり読んだりというインプットを理解することを通して習得されるとしている。そして、そのインプットは、学習者にとって理解できないインプットでは意味がなく、「理解可能なインプット」でないといけないとされている。さらに、現在の学習者の言語レベルよりも少し高いレベルのインプットが（「i+1のインプット」）が必要だとしている（大関，2010，p. 59）。
- 6) Vygotskyは、発達段階に合わせたちょうどよい難易度の課題が、効果的な段階的発達を促進するとして、そのちょうどよいレベルのことを発達の最近接領域と呼んだ（西城，2012，p. 293）。
- 7) 学習者と母語話者とのインターアクションが言語習得には必要であるという考え方。習得を引き起こすものは理解可能なインプットであるという考えが基本にある。インターアクションによってインプットの理解度が高まり、それが言語習得につながるという（大関，2010，p. 60-61）。
- 8) オンラインビデオ会議システム <https://zoom.us/jp-jp/meetings.html>
- 9) Aさんが受けた「電話日本語」教育は、メールで教材を受け取り、韓国に住んでいて韓国語もできる日本人の先生と電話でフリートーキングをする形だったと言う。
- 10) シャドーイングは、相手の発する音声を正確にまねることを基本とする（望月，2006，p. 38）。

文献リスト

- 浅川希洋志，静岡大学教育学部附属浜松中学校（2011）『フロー理論にもとづく「学びひたる」授業の創造：充実感をともなう楽しさと最適発達への挑戦』学文社
- 浅川希洋志，チクセントミハイ，M.（2009）「効果的e-Learningのためのフロー理論の応用」『日本e-Learning学会誌』9，4-9.
- イ，ヒョンジュ（2019）「元留学生社会人のライフストーリー：日本在住韓国人の言語習得とアイデンティティを中心に」『待兼山論叢 日本学篇』53，39-62.
- 石村郁夫，河合英紀，國枝和雄，山田敬嗣，小玉正博（2008）「フロー体験に関する研究の動向と今後の可能性」『筑波大学心理学研究』36，85-96.
- 大井田かおり，吉住千亜紀，中辻晴香，尾久土正己（2018）「フロー理論に基づく外国語学習 360度ドーム映像を使った第二外国語学習」『教育メディア研究』25(1)，1-18.
- 大関浩美（2010）『日本語を教えるための第二言語習得論入門』くろしお出版
- 鹿毛雅治，櫻井茂男，中谷素之，浅川希洋志，伊藤忠弘，無藤隆，金井壽宏（2011）「動機づけの教育心理学-その成果と課題-」『教育心理学年報』50，31-34.
- 加藤泰久，喜多敏博，中野裕司，鈴木克明（2013）「フロー理論に基づく学習教材・学習環境再設計支援のためのチェックリストの評価と改善」『教育システム情報学会誌』30(3)，200-211.
- 川上郁雄（2015）「あなたはライフストーリーで何を語るのか-日本語教育におけるライフストーリー研究の意味」『日本語教育学としてのライフストーリー』くろしお出版，24-49.
- 西城卓也（2012）「正統的周辺参加論と認知的徒弟制」『医学教育』43(4)，292-293.
- 崎山拓郎，寺尾智史（2017）「言語教育におけるフロー理論に基づく学習環境作りについて-中学校

- 英語教育とオンデマンド言語学修の場から」『宮崎大学教育学部紀要 教育科学』88, 1-17.
- 佐藤正則 (2013) 「留学経験の意味と自己実現についての考察:元留学生のライフストーリーから」『言語文化教育研究』11, 308-327.
- 杉山卓也 (2019) 「スポーツにおけるフロー状態とその直前の心理状態の関連に関する研究: 共分散構造分析を用いて」『静岡大学教育実践総合センター紀要』29, 143-151.
- 鈴木ひろみ, 大宅利美 (2022) 「中国語授業へのGWT導入の試みー中国語タスクでフロー体験ー」『中央大学論集』43, 51-64.
- 瀬井陽子 (2021) 「教室外で日本語を学ぶ学習者向けの日本語学習アドバイジング: 理論的枠組みと導入への取り組み」『多文化社会と留学生交流:大阪大学国際教育交流センター研究論集』25, 31-36.
- 潜道文子 (2022) 「「働き方改革」に求められる 「働きがい」 の視点とその意義」『拓殖大学経営経理研究』121, 109-133.
- 富谷玲子 (2009) 「第九章 ニューカマーのことばと暮らしー横浜市における市民と行政の取り組み」『神奈川大学人文学研究叢書24 在日外国人と日本社会のグローバル化 : 神奈川県横浜市を中心に』御茶の水書房, 213-244.
- 中井好男 (2018) 「社会的文脈から日本語学習と学習者オートノミーを捉える試み: 日本で働く中国出身者の学習経験についてのライフストーリーをもとに」『阪大日本語研究』30, 93-110.
- 松下奈美子 (2021) 「東アジアにおける高度人材の国際労働移動の誘因分析 —1980年代から2000年代の韓国人IT人材の日本への移動を中心に—」『情報通信学会誌』39(2), 59-70.
- 望月通子 (2006) 「シャドーイング法の日本語教育への応用を探る: 学習者の日本語能力とシャドーイングの効果に対する学習者評価との関連性を中心に」『関西大学視聴覚教育』29(20060331), 37-53.
- 吉田一平, 平尾一樹, 野中哲士, 小林隆司 (2022) 「フロー理論を応用した作業療法実践に関する文献レビュー」『作業療法』41(1): 13-20.
- 渡邊洋子 (2007) 「成人教育学の基本原則と提起ー職業人教育への示唆ー」『医学教育』38(3), 151-160.
- Csikszentmihalyi, M. (1975). *Beyond Boredom and Anxiety* 『몰입의 기술』이삼출訳 (2003), 더불어책, 韓国.
- Csikszentmihalyi, M. (1990) *Flow: The psychology of optimal experience* 『몰입: 미치도록 행복한 나를 만나다』최인수訳 (2004), 한울림, 韓国.
- Csikszentmihalyi, M. (1993) *The evolving self* 『자기진화를 위한 몰입의 재발견』김우열訳 (2009), 한국경제신문, 韓国.
- Csikszentmihalyi, M. & Csikszentmihalyi, I. (1988) *Optimal experience: Psychological studies of flow in consciousness*. Cambridge University Press
- Egbert, J. (2003) A study of flow theory in the foreign language classroom. *The Modern Lan*

- guage Journal*, 87(4), 499-518.
- Horwitz, E. K., Horwitz, M. B. & Cope, J. (1986) Foreign language classroom anxiety. *The Modern Language Journal*, 70(2), 125-132.
- Jackson, S.A. & Marsh, H.W. (1996) Development and Validation of a Scale to Measure Optimal Experience: The Flow State Scale. *Journal of Sport & Exercise Psychology*, 18, 17-35.
- Kimura, H. (2008) The challenge of learning to listen: From the perspective of flow theory. 『名古屋学院大学論集 言語・文化篇』20(1), 75-94.
- Krashen, S. D., & Terrell, T. (1983) *Natural approach: Language Acquisition in the Classroom*. California: Alemany Press.
- McQuillan, J., & Conde, G. (1996) The conditions of flow in reading: Two studies of optimal experience. *Reading Psychology: An International Quarterly*, 17(2), 109-135.
- Mitchell, R. G. (1988) Sociological implications of the flow experience. *Optimal experience: Psychological studies of flow in consciousness*, 36-59.
- Nakamura, J., & Csikszentmihalyi, M. (2002) The concept of flow. *Handbook of positive psychology*, 89-105.
- Schmidt, R. (2012) Chapter 2. Attention, awareness, and individual differences in language learning. In W. Chan, K. Chin, S. Bhatt & I. Walker (Ed.), *Perspectives on Individual Characteristics and Foreign Language Education* (pp. 27-50). Berlin, Boston: De Gruyter Mouton. <https://doi.org/10.1515/9781614510932.27>
- Seidman, I. (2019) *Interviewing as Qualitative Research: A Guide for Researchers in Education and the Social Sciences, Fifth Edition* 『질적 연구 방법으로서의 면담』 박혜준, 이승연共訳 (2022), 학지사, 韓国.
- 김선영 (2021) 「일본(해외)취업 역량강화를 위한 교육 방안 연구 -한국인 취업자와 일본기업 인사담당자 앙케트 결과를 바탕으로- (日本(海外)就業力量強化のための教育法案研究-韓国人就業者と日本企業人事担当者アンケート結果をもとに)」 『일본어문학 (日本語文学)』 94, 23-51.
- 임경식 (2019) 「한국산업인력공단의 해외취업지원사업 현황과 전망 (韓国産業人材公団の海外就職支援事業の現状と展望)」 『한국일본어학회 학술발표회 (韓国日本語学会学術発表会)』 14-20.

図表リスト

- 図1 フロー経験の生起モデル
- 図2 フローの発達モデル
- 表1 インタビューの質問項目
- 表2 研究協力者の概要

Japanese Language Learning Experience of Korean Newcomers
from the Perspective of the Flow Theory

PARK Wookyoung

Abstract

Foreign workers of diverse genders, races, nationalities, and values are living in Japan. Support for Japanese language learning is needed so that they can build long-term careers in Japan. In recent studies in the field of pedagogy, the Flow Theory is actively discussed to promote the Flow experience in educational and learning scenarios. This is because Flow is a feeling of satisfaction per se, increases intrinsic motivation, and leads to high achievement. The purpose of this article is to analyze the Japanese language learning experience from the perspective of the Flow Theory. Three Korean newcomers were interviewed, and four characteristics of Flow, viz., ‘balance between challenge and skills’, ‘attention’, ‘interest’, and ‘sense of control’, were confirmed from the interview data. At the same time, the following were also ascertained: the problems they encountered with the Japanese language, how to deal with them, when they perceived their lack of Japanese language ability, and how they were learning. Findings reveal that Korean newcomers have accumulated Flow experiences until they acquire current Japanese skills, and because of such experiences, they are still practicing Japanese language learning.

Keywords : Japanese language learning experience, Korean newcomers, Foreign workers,
Flow theory, Phenomenological interviewing